

14

8月2022

直腸がんステージ4を生きる ～言葉は人間の持つ最大の薬～

こもれび・けんじ(福岡市在住)

全5ページ

「明日すぐ、国立病院に行ってください」

昨年(2021年)の年末、通いなれた血圧の病院で腹部エコーの検査を受けました。お腹の調子が良くないことを先生に伝えたら「エコーで見てみましょうか」と言われたのです。

いつもの定期検査の感覚でいたところ、カメラを腹部に当てながら主治医が困ったような顔をしています。少し不安を感じて「どうですか、先生？」尋ねてみました。

一瞬間をおいて主治医から「写真ができるまで待って下さい」との返事でした。少し間を置いて再び診察室に入ると「直ぐに紹介状を書くから国立病院に行きなさい」との指示でした。私はのんびりと「仕事終わりの週末で良いですか？」と質問すると主治医は困った表情でしたので、私は再び、「週末でも良いですか？」と、たずね直しました。見るに見かねてと今では思うのですが、看護師さんが、少し強い口調で「先生がおっしゃっているのだから、明日すぐ、病院に行ってください」と言われました。

突然の余命宣告

翌日、会社を休んで妻に付き添われ、国立病院で検査を受けたところ、直腸がんのステージ4との宣告を受けました。

初対面の医師はためらいながらも毅然とした態度で私たち夫婦に言われました。「ステージ4の直腸がん、肝臓、腎臓に転移していて、がんによる尿管圧迫で排尿障害、小さいがんの播種が多数あり、このままでは余命数か月です」。ショックを受けている妻を背中を感じながら「長くて私の命はどのくらいですか？」と聞く私に、直腸がんステージ4の平均寿命は2年半、5年寿命を延ばすのは0.数パーセントと宣告されました。

私もショックでよく覚えていませんが、「宣告を覆す」と言い続けていたのを記憶しています。紹介状をもらい次の泌尿器の専門病院受診の予約日を決め家路に帰る途中で同伴していた妻の感情が爆発しました。「あんたが死んだら残された私はどうなるの？天涯孤独よ！」。妻が地獄の一丁目にいる心境だったのはがんの宣告を受けた時から判っていました。あとで、妻にその時の気持ちを聞くと「あの時は、ショックが凄くて涙も出なかった」とのことでした。

「余命宣告を覆す」～妻より先に死ねない

そうだろうな～ふたりとも精神の障害を抱えながら夫婦で身寄りも無く世の中を渡って来ましたから、ふたりの絆は一般家庭の夫婦よりも人一倍強いと私たちは自負していました。妻もまた、統合失調症という病を持っているのです。ですから、妻の言葉の意味はよく理解出来ました。妻より先に死ねないといつも思っていたので生きると言う当たり前の事に、死という言葉が降りかかって初めて、絶対に死ねないと実感できました。



コラージュ制作 こもれび・けんじ

精神科主治医の言葉に救われる

診察室を出て、病院のロータリーのベンチに夫婦二人で座り、精神科の主治医に妻が電話をしました。妻も私も、同じ先生にかかっています。

主治医はがん患者さんの緩和ケアもしておられます。電話を替わった私に「貴方は余命宣告を覆すよ」と、また、余命宣告された患者さんが何十年と寿命を延ばし、診断書を何回も書き直した事もあると、言ってくれました。その言葉は妻と私の最大の希望になり薬になりました。

がんであることを伝えると、人それぞれ反応が違いますが、ネガティブにとらえる人が世の中多いのに驚きました。ステージ4のがんをポジティブに考えられる人はごく少数ですね。ネガティブをポジティブに変換思考できる方は稀であると思います。

ポジティブな思考を続けるためには医療や家族、友人を信頼し感謝することから始めて行きます。人間は、信頼されることにより最大の能力を発揮できるのではないかと考えます。信頼関係を築く過程の中でよい言葉を浴び続けることで、言葉が薬になり免疫力が向上します。

正直疲れますが、私が元気だと周りが元気になり良い環境の中で治療していけます。

幸せは不幸の中に隠れている小さな砂金のようなものではないでしょうか？

ネガティブな毒が回る環境の中では、自分の足元しか見えてないからかえって危なくなり「注意一秒、怪我一生」です。

世の中で一番怖いのは人間であり最大のコミュニケーションツールである言葉だと思います。しかし人間の薬も人間が発する言葉であります。言葉は一番の薬であり毒でもあり、表裏一体なのでしょうね。だから、良い薬の言葉を信じて、悪い毒の言葉をバリアーで防いで右の耳から左の耳にスルーして、「いい加減」を「良い加減」に、テキトーに無理なく生きることです。言葉が良いか悪いかわかりませんが、私にはそれが最善の環境になります。

病魔と生活苦に見舞われて

がんの発見で仕事も辞める羽目になり収入源は夫婦二人の障害年金のみ、次から次に襲い掛かるがんの治療代のため、治療と生活保護申請を同時に進めて行きました。経済苦が、病魔が、私の家庭を苦しめました。生活保護審査中のため、治療は実費で、国立病院だけで月40万円以上の治療費を請求され、受診の度に念書を書いていました。

妻は不安神経症も持っていますので、ストレスで症状が出るのは当たり前の状態でした。夜な夜ながんの事で夫婦喧嘩。経済苦、私の生死の問題、心の健康、体の健康、全てが悪い方向に向かっていきます。

妻が自殺するのではと心配になり、ならばいっそ夫婦で自殺しようか、妻を助けるために離婚しようかと何度も考えました。

ただ、私の頭の中にあったのは、妻より先に死ねないとの思いの方が強かったです。

くよくよとネガティブに夫婦で考えていたら二人とも本当に死んでしまう。意志を強く持とうと、精神科の主治医の「貴方は余命宣告を覆すよ」の言葉を思い出して頭の中で考えました。

精神障害を持って病状をコントロールして25年。誰にも頼らずに夫婦二人で生きてきた事に自信を持とう、精神科の主治医の言葉を信じよう、そう決断したら、気持ちが楽になりました。根が単純、切り替えスピードが速いが私のモットーですから妻の表情を見ながら私は妻に言い返しました。「精神科の主治医の言葉を信じよう！余命宣告を覆す！」半分意地になっていましたが、その言葉を妻に言った事でネガティブな部分が消えました。妻の不安神経症のおかげです。とは言っても夫婦喧嘩は今でも継続中ですが…(笑)

トラブル続きの治療

昨年末にがんが見つかった時、直腸がんが尿管に転移し、圧迫して排尿障害を起こしていたので、管にリングを入れて尿管を広げることから治療が始まりました。が、年明けの泌尿器科での手術時にカメラのついた手術用のケーブルが圧迫された尿管の途中までしか入らずに手術を断念、直腸がんの手術時もケーブルが入らずに手術を断念・・・トラブル続きでした。主治医からも「治療の順番はどうにでもなるから、でも、悪くなったら自宅には戻れませんよ」と、言われました。かえって度胸がつきました。人工肛門(ストーマ)をつけて、排便はうまくできるようになりました。

薬物治療が劇的に効く

ある日、がんの主治医が「あなたに合った薬が見つかったから、やってみましょう！」と言いました。FOLFOX という3剤併用の抗がん剤に、私のがんの遺伝子型に合った分子標的薬をプラスした治療法だそうです。標準治療です。手術ができなかった私は、この治療に最後の望みと命を託すしかなかったのです。

すると、奇跡が起きました。3か月でがんが縮小し、血液検査の異常数値が正常値に向かって行ったのでした。がんに圧迫されていた片方の尿管も開通し排尿も楽になりました。抗がん剤治療は2週間1回のペースで行いますが、検査結果の紙を夫婦で見るのが楽しみになりました。また、生きる自信が検査結果を見る度に湧き起りました。主治医から「がんを治す人にやる気があると薬は2倍も3倍も効果があります」と言われました。その言葉で私の中の治療に対するやる気が自信に変わりました。また、死を宣告された事で周りの人たちに感謝する、大切にできる感情が強くなり生きることが楽しくなりました。苦の中から生きる喜びを見つけることができました。

がんと仲良く暮らしていきたい

がんの腫瘍マーカーも当初は350超でしたが、3か月後には12に、その1か月後には腎臓と肝臓の血液検査の数値も正常値になりました。小さいがんの播種も消えていました。おおもとの直腸がんも肝臓のがんも腎臓のがんも小さくなっていました。残ったがんを私は愛そうと思います。生きて行くための肥料にしようと思います。がんが無くなることはないと言われてきました。嫌ですが、がんを患った人間は、がんと仲良く、再発せずに転移せずに無理なく暮らしていくことが最善の治療だと本能的に思うからです。だからがんを愛します。自分が困らないように知恵をつけながら。最強最愛の家族と、親身な医療者と友人たちの中で今日も元気に無理なく生きて行きます。

再就職する

あ、その後のことも書いておきますね。実は、就職したのです。私は、ヘルパー2級と障害者のためのガイドヘルパー資格を持っています。治療がうまく行って元気を取り戻したので、早速、仕事を探すことにしました。ネットの障害者枠の就職案内でヘルパー募集を見つけて応募したところ、即採用になり、早速、働き始めました。抗がん剤治療と並行しての仕事なので大変な面もありますが、経済的にも助かり、社会人としての自信もついてきました。がんで仕事を辞める羽目になりましたが、回復して就職まで漕ぎつけたのです。妻にも笑顔が戻りました。ありがたいことです。

つたない文章ですが、読んでくれた方々と時間を共有できたことを誇りに思います。心から感謝いたします。

(了)



イラスト こもれび・けんじ

作者プロフィール こもれび・けんじ(54歳)

1967年、宗像市生まれ。福岡市在住。統合失調症を抱えながら妻と支え合って暮らしていた2021年末、突然、ステージ4の直腸がんが見つかる。派遣の勤務先に伝えると即解雇。生活保護を申請しながらの治療となる。幸い、生活保護が受給でき、薬物治療が良く効いて、新しい仕事も得て元気に過ごしている。